

卷之三

龜谷
行編

修身兒訓

三

0843
1
43

脩身兒訓卷之三

第一章

立志

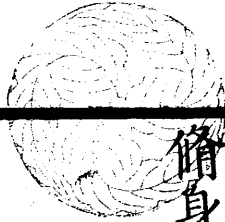
龜谷行編



○道近しと雖ども。行くさまハ至らざ。
事小なりと雖ども。為さずを成らば。韓詩

外傳

○有志の士ハ利刃比如し。百邪辟易也。
無志此人ハ鈍刀の如し。童蒙侮翫也。言志



脩身兒訓

卷之三

一七風社成友

○人事百般をばく遜讓を要す。但志を師に讓らざるべく。又古人に讓らざるべし。同上

○馬援曰く。丈夫の志たる。窮してハ益、堅うるをばく。老ても益、壯なるべし。

第二章 勉強 愛日

○陶淵明の詩と曰く。成年を重て来ら

ず。一日を再び晨あり難し。時を及びて當り勉強をべし。歲月を人を待たず。

○勃古斯敦曰く。我、他人より一倍の光陰を用ゐる。一倍此勞苦を為さば。必は他人乃成せる事業を成し得べし。歐米立志金言

○光陰の重んじべきを知るとき、定期を愆らざるの習。自うと生じべし。同上

○禮諾爾圖曰く。辛苦此事を。卓絶の才

に進むべきの道なり。絶妙の地位也。辛苦の人比獲べき恩賞あり。同上

○常々勞作して已まざ。職業の繁多あるを嫌はず。世務を任す。他人と交通し實事小砥礪をふる。人生比主義なり。西洋

論品行

○を一事の成就せんことを望まば。自ら往て力を爲すべし。も一事比成

就せんことを望まされむ。他人にイハツク附

すべし。歐米立志金言

○那比爾曰く。困難愈甚しければ。愈多く勞苦を爲さべく。危険愈甚しければ。愈多く勇氣を顯さべく。同上

○勤勉の人を。萬物を化して。黄金と爲すの術あり。光陰と雖ども。亦之を黄金に化さべく。同上

第三章

學問

○嘉肴ありと雖も。食をざせば其旨を知らざる也。至道ありと雖も。學をばれば其善哉知らざる也。禮記樂記

○朱子曰く。學問の道。敢て自うと是なりとせず。虚くして以て人を受まば。自ら得ることあり。

○又曰く。學を爲すは。須らく今は是

ちりて。昨の非あるを覺ゆべし。日は改め月も化して便ち是長進也。

○薛文清曰く。他事をして。學を好むの心も勝とまめざれば。必ず進むことあり。

○倪文節曰く。書を觀るはと一卷あるを。一卷の益あり。書哉觀ること一日を。一日乃益あり。

第四章

交際

○荀子曰く。我_レを非_レや_レ去_レく當_ル者_ハ。吾_レが師あり。我_レを是_トして當_ル者_ト。吾_レが友あり。我_レに諂_レ諛_レを_ル者_ハ。我_レが賊あり。○善人_ト璞_ノ玉_ノの如_ク。惡人_ト錐_ノ鑿_ノの如_ク。玉_ヲ錐_ノ鑿_ヲを經_サさ_レば。器_ヲを成_サさ_レど。凡_ソ我_レを毀_ル者_ハ。乃_チ我_レを成_ス者_也。紳瑜

○小人固より當_リ遠_クべし。然れども亦顯_カる_ニ仇_ノ敵_トとな_リを_レ屈_カた_ラず。君子固

と_モ當_リ親_ムむ_ニ至_リ。然_レも亦曲_テ附_ク和_スべ_クあら_ズ。願體集

○事を人_ニ問_フハ。虚_ノ懷_ヲを要_ス。毫_モ挾_ム所_アる_ベうら_ズ。人_ニ替_テ事_ヲ成_ス處_ヲを_レ周_ニ匝_ヲを要_ス。稍_ク缺_ク所_アる_ベか_ラず。

於言志
錄

○人_ヲや談_話を_ルた。屢_クを_レ屈_カし。長_クる_ベうら_ズ。長_ク談_話を_ル人_ヲを倦_マし_メ。人_ニ嫌_ムる_。

智氏
家訓

○人と論ずるハ。須らく容顏從容。言語
温厚なふべし。決して劇烈な言をなす
べし。紳瑜

○人乃詐りを覺るも。之を説破せむ。其
自ら愧る我待て可なり。若し夫れ愧を
知らざる人ハ。又何ぞ責めん。金言

○人の小過を責めむ。人死陰私を發り

也。人の舊惡を念をす。三乃者も惟以て
徳を養ふは。之を爲す。亦以て害を遠け
とべし。遵生
ハ膳

○年高くと志く徳なく。貧極りて恥を
兇惡にして禮を顧みず。愚謬にして禮
を明かせず。此四等の人を。與に較べん
くはぬ。習是
編

○一坐の中。好て言を以て人を彈射を

ふ者あまきだ。吾宜く端坐沈黙し。以て之
を銷せぬ。此哉不言の教や。謂ふ。願體集

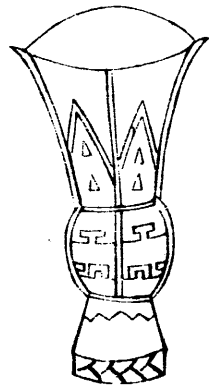
○人此私語を見てハ。耳を傾て竊し聽
くまと勿き。人此私室に入りてハ。目を
側て旁觀せむこと勿れ。同上

○隣家喪あはれむ。快飲高歌をなすべし。

新喪の人を對し。劇談大笑をべうらば。瑜紳

○薛文清曰く。郷人の子處をる。皆當し敬

觚不觚



觚哉觚哉

して之を愛せべし。
三尺の童子と雖ど
も。亦當し誠心を以
て之を愛すべし。侮
慢をべうらば。

○又曰く。人の微賤
を於る。皆當し誠敬
を以て之を待つべ

青龍閣

七

一。忽せよ。慢るべからず。

○子弟僮僕。人とあひ争ふ者あまは。只自うと戒飾を行ふべし。怒我別人。よ加ふべからず。金言

第五章 處事

○事を做す。最も宜く熟思緩處を盡し。熟思を盡む其理を得。緩處をれば其當を得。紳瑜

○遠路に書札を寄するに。當に前夕に於て之を成すべし。發するに臨む勿々之を成すべし。必だ遺漏多し。金言

○人の書畫を借り。損汚遺失をべからず。閱し畢らば。即ち還すべし。借書中。偽字あまは。隨て別紙を以て記出。本條の下に置くべし。同上

○貝原益軒曰く。盛怒乃時中方り。慎て

修身記 卷之三 八

妄に簡を與へ。言を發せしること勿れ。之を妄にすまば。必ぞ悔あり。

○許平仲曰く。盛怒の時中於て。堅く忍びく動らず。心平あるを俟ち。審みて之に應む。庶幾くハ失ふ。

○徑路窄き處ハ。一步を留め。人の中與へて行り止め。滋味ある時ハ。三分を減す。人の中譲りて嗜まむ。此ハ是世我渉る

の法あり。習是編

第六章 治産

○彌爾列爾曰く。工事を勤むるハ。たとひ極めて勞苦の業多りとも。中無量の樂趣充滿し。又自らを此身を進修する所以の具なり。歐米立志金言

○たとひ卑賤ある辛苦乃職業よりとも。毎日抄の定課を完うしたらんハ。

と此他の時間を盡くみる甜美なるを
覺ゆゆきる可。同上

○辛苦して賤工を為し。艱難して衣食
を得るハ。百事具足し。枕を高之して。眠
る不比をたたむ。更も不幸あり。同上

○正直な生業を為し。人に害を加へば。
己に不属せざる物也。之を其主に還すべ
し。同上

○和睦勤儉な者也。家必に隆え。乖戾
驕奢なる者也。家必に敗る。此理。券を操
るが如し。斷々爽をず。且に之を驗するも。
甚ど速うなめ。金言

第七章 安分

○譚子曰く。奢る者は富もても足らば。
儉なる者は貧もくても餘あり。奢る者は
心常に貧しく。儉なる者は心常に富む。

○分も過ぎ福を求めた。適^く以て禍を速
めん。分も安んじ禍を遠くせむ。將^も
自ら福を得んと欲^す。紳^瑜

○人の一生も路を行くが如し。一歩^づ

進むとや。戔^て以て。足れりとせむ^{べし}。歐米立^{志金言}

○伯氏^{ノリノ}曰く。吾が富む。吾が産業の大か
るも非^{べし}。吾が需用の少きもあり。

第八章 倫常

○白虎通^子曰く。三綱とを何の謂ぞや。
君臣父子夫婦を謂ふなり。君は臣に綱
たり。父を子に綱たむ。夫は妻の綱なり。
○孟子曰く。父子親あり。君臣義あり。夫
婦別あり。長幼序あり。朋友信あり。

○貝原益軒曰く。孝は百行の本あり。故
ふ人として孝あるをば終む。其本先^づ絶
め。他の善行良才ありと雖ども。觀るも

足らぬ。

○曾子曰く。父母之を愛をせバ。喜て忘れバ。父母之を敬をせバ。懼て怨むるを。父母過ち有せバ。諫く逆をせず。

○程伊川曰く。病て牀に卧し。之を庸醫に委ぬるハ。不慈不孝に比せ。親に事ふ者。亦醫を知らぬる可うらば。

○父母は其子の顯榮を以て。己の幸と

為す。故に子とる者。其恩を忘る。惡業を行ふ。父母をして憂をせしむること勿し。勸善

訓蒙

○兄弟と過失ありとを。互に慎んで之を隱諱をせしむ。同上

○人。友悌を欲せば。一身の欲を抑制し。常に兄弟姉妹を惠愛し。其益を思ふこと。猶己の益を欲するがごとくをべし。同上

○族人を皆其祖先
 を同りし。共ニ一家
 戎ノ為ニをのたり。故
 小互ニ親愛し。互ニ
 保護し。其家名を損
 せズ。之レ戎子孫ニ傳
 ふべし。同上

○人其國を愛敬す

勤儉治家之本
 讀書起家之本
 和順齊家之本
 循理保家之本
 選朱文公語

る。猶ト其父母を愛敬するがごとくをべ
 し。若し國ニ於て非理の事を為すと雖
 ども。我レ之レを怨ミて。其害戎ノ為ニをべし。上同
 ○谷グ惹レ西シ曰く。我レが財貨。我レが性命ハ。我
 小属する物ニあり。其實を皆我レが國
 小属するものあり。歐米立
 志金言

第九章 厚德

○陳幾亭曰く。人ニ周ラすを樂む者

は。自づら奉ずるふと必む薄し。身小奢
ふ者た。惠の親尔及む。録畜徳

○吳懷野曰く。其心厚た者ら。其福厚し。
其量弘き者た。其徳弘し。日計足らざも
ど。月計餘りあり。同上

○人乃短を匿はむ。人の急をまくなざ
る。仁義の人よ非ざる也。同上

○君子能く人の危きを扶け。人乃急を

まくなふ。固く是美事あり誇らざむ。た

益善し。願體集

○恩を施すと雖ども。後必其報を得ん
とむるの念ある者。善を行ふ。あら
ど。唯恩を交換するの。之を稱譽する
不足らむ。勸善訓蒙

○人も己の産業と。他人比窮乏を比
較し。以て恩を施さむ。同上

○小人専ら人此恩を望む。恩過ぐせば感ぜば。君子軽く人の恩を受ず。受くれば忘る難し。紳瑜

○我人小功あまは念ふべからず。而して過ちた念まざるを知らず。人我も恩阿れど忘るべからず。而して怨を忘るはさる難うらず。同上

○薄福の者を必ず刻薄あり。刻薄あれ

を福更ふ薄し。厚德の者を必ず寛厚なり。寛厚を徳更ふ厚し。同上

○貧者の悲叫を聞きて。感動をざる者。真に薄情と謂ふ也。他日己が悲を叫ぶことあらん時。人之を聞きて。憫ま

ざる也。勸懲
雑話

○汝他人を恤まば。人も亦汝を恤まん。汝善く他人を遇せば。人も亦善く汝を

遇とん。同上

○孔子曰く。善を為す者ハ。天之小報る

小福を以てし。不善を為す者ハ。天之小

報る小。禍戕以て屯。孔子家語

○陰徳ある者ハ陽報あり。陰行ある者

と必以昭名あり。淮南子

○父母善を積めた。子孫家を固くし。父

母善を積まざれた。子孫家或覆屯。勸懲雜話

○善小善報あり。惡小惡報あり。善惡報

あるを。時節未と至らば。事林廣記

○劉宗周曰く。一時人を勸する所の口

を以て屯。百世人或勸むる所の書を以

て以。善本を刊刻し。廣く流布するは以

亦人と善をあるを乃一端なり。劉氏人譜

第十章 躬行

○薛文清曰く。天地を吾が父母あり。凡

そ行ふ所あきを。吾父母の命に順ふことを知るのこ。其他を恤ふるに違阿らんや。

○又曰く。天を敬むること。當り吾が心を敬するより始む。其心我敬するこ。能はぶ志く。能く天を敬すと謂ふ者。妄あり。

○胡文定曰く。心を立つるに。忠信に

あり。欺らざるを以て主本といふ。

○孝悌忠信を身を立てるの大本。禮義

廉耻を己を行ふの先務あり。省心 雜言

○坡可羅曰く。智識は日新進動の活物

あり。道德は萬世不易の定則あり。

○難に臨まざれば忠臣の心を見ず。財

に臨まざれば義士此節を見ず。省心 雜言

○丈夫一生廉耻を重しといふ。切に人よ

竹書紀年 卷之三 光武初年

求る勿也。死生命あり。續小児語

○凡そ児童ハ。須らく是衣冠整齊。言動

端莊あるべし。蕪耻の二字を識り得る

ハ。自然正大明の氣象あり。言行彙纂

○子貢問て曰く。一言ハ一以て身を

終るまで之を行ふる者ありや。子曰

も。其恕。己が欲せざる所ハ。人ハ施さ

ざる勿れ。

○中庸ハ曰く。忠恕道を違ると遠か

らば。諸我己ハ施して願わんバ。亦人

ハ施すよや勿也。

○朱子曰く。己が心を盡せしを忠とあし。

己が推して人ハ及以て恕と為す。

○司馬温公嘗て言ふ。吾人ハ過る者な

し。但平生為る所の事。人ハ對して言ふ

べからざる者あり。劉氏譜

竹書紀年 卷之三 十八 光武初年

修身記 卷之三 孝弟 孝弟 孝弟

○省心録云曰く。晝の為に所ハ。夜必だ
之を思ひ。善あまハ樂し。過あまハ懼る。
君子ある哉。

○一日の中。或ハ一善言を聞た。一善行
を見。一善事或行へバ。此日虚しく度ら
べし。紳瑜

○衣垢きて洗をむ。器缺て補をむ。人子
對して猶慙る色あり。行垢を洗をむ。

周廟
金人



三緘
其口

徳缺て補をむ。天子
對して豈に愧る心
無らんや。樵談

○程子曰く。言語を
慎む。以て其徳を養
ひ。飲食或節し。以
て其體を養ふ。事の
至近にして。繋る所

修身記 卷之三 孝弟 孝弟 孝弟 十九

修身記 卷之三 二十

至大なる者也。言語飲食不過ぐるハ莫し
○富貴ハ傳舎の如し。惟謹慎をまむ。久
く居ふことを得難し。貧賤ハ敝衣の如
し。惟勤儉を修む。以て脱卸をべし。習是編
○家長禮を知らば。男女勤儉。衰門と雖
ども亦必ぞ興るあり。其一時の貧富ハ。
未ぞ論むるに足らば。紳瑜
○政を為るに要あり。公と曰ひ。清と曰

ふ。家を成るに道あり。儉と曰ひ。勤と曰
ふ。省心
雜言

○司馬温公曰く。凡そ諸の卑幼。事大小
となく。専らを行ふことを得る母也。必
ぞ家長小咨稟せよ。

○自ら重んぜざる者ハ辱を取り。自ら
畏まざる者ハ禍を招く。自ら満たばる
者ハ益を受け。自ら足まるとせざる者

修身記 卷之三 二十

て聞戎博くを。願體集

○門内嬉笑怒罵を聞くこと罕きを其家範知るべし。座右多く名語格言を書き置ば。其志趣知るべし。同上

○揚慈湖曰く。智ある者ハ問を好て樂み。智なき者々自ら用ゐて憂ふ。畜徳録

○人の小過を責めば。人乃陰私を發せど。人の舊惡を念なきるを。真し是妙人

あり。紳瑜

○忍を亦辨あり。勢を畏きて忍ぶ者ハ忍と為ま不足らば。畏る可きの勢無くして忍ぶ者ハ。是を真し忍と為れ。同上

○人より恩を受けむ。必之を報ゆべきこと。猶人より借りたる金貨銭還を

返らさ等し。勸善訓蒙

第十一章 警戒

十一 警戒

○荀子曰く。人ハ三の不祥あり。幼ハ一
 テ敢ク長ハ事ヘビ。賤ハ長ク敢テ貴ハ
 事ヘビ。不肖ハ一テ敢テ賢ハ事ヘざる
 也。是レ人乃三不祥なり。

○不肖を以て人を待つ。愚者と雖ども
 甘んぜば。非禮を以て人ニ處ス。賤者と
 雖ども亦怨む。習是編

○食を節みそけら疾を。言を擇べ

禍あり。禍の生ずる也。天より降るハあ
 らず。皆其口より出。西疇常言

○凡そ宴會賓客雜坐ハ。質疑問難の時
 非非。詩文を講説。自ら博雅を誇る
 事。恐らくは知らざる者之を恨
 むん。金言

○古人の是非を品評するハ可あり。今
 人乃善惡を妄議するハ不可あり。恨

我取るよと。多くハ妄議ニ在リ。言志 録

○才を猶劍のごとし。善く之を用ゐれば。以て身と衛するべし。善く之を用ゐれば。以て身を殺すに足る。同上

○人此癖を擬するハ。卑夫の好む所なり。計らざるの禍を生むることあらん。智氏 家訓

○人の善を聞て疑ひ。人の悪を聞て信

ト。好て人此短を説き。人の長我計らば其人平生必び悪ありて善なし。願體 集

○我ダ人小如うざるを怨むる我休よ。我ニ如あはざる者尚衆し。我が人小勝ると誇ふを休よ。我ニ勝る者還多し。紳瑜

○常ニ虚誕を説く者も。時ありて信誠のよとを言ふと雖ども。人之を信せば上同
○大醉も人の不善を増せ此ニ非ず。

更も人ひとをして心こゝろ有あせざるの不善ぜんを生ぜしや。勸善訓蒙

○朝あまたて食をさまだ。晝ひるもして饑う。
少すくくして學まなむをさまだば。壯むしくて惑ふ。饑
る者ハ猶なほ恐おそぶべし。惑まどふ者ハ奈何とをす
す處からじ。言志錄

○安やす逸いを恣にまましば。己おのれが失を増す。才
能を恃ためば。人ひとの嫉を招く。靜寄軒文集

○我われ如ごとく善を為さば。一ひと介けいの寒士さむしと雖
ども。人ひとの其德とくハ感むるあり。我われ如ごとく惡
我われ為なせど。位ゐ人ひと臣しんを極むと雖ども。人ひと乃すなは
其その過とがちを議ぎする有里。同上

○人ひとハ貴賤けんを論ぜど。一ひと日にち當あたさし作しす
重おもきの事ことあり。若ごとく飽食あき煖あたた衣いして。事ことを
事こととせむんハ。何なにぞ好結果けつあるを得ん。

願ねが體たい 修身見訓卷之三 終

稟准

東京炎風社

明治十四年之冬以後製本以此紙為証

明治十三年十一月廿五日版權免許
同 十四年五月二日出版
同 十五年五月卅一日再版

第廿三丁裏七行
目重複アリ再版
ニ付改正ス

編者出板

東京府士族光風社長

龜谷行

東京神田區金澤町十番地

發兌

素

大阪

柳原喜兵衛
梅原龜七
岡島真七
牧野善兵衛
木野慶次郎
吉川半七
石塚徳次郎
石川沼兵衛

價目表

卷三

光風社藏版

龜谷
行編

脩身兒訓

四

084,3

I

34